



《ももたろう》 2007

五味太郎作品展 〔絵本の時間〕

5月29日(火)～7月1日(日)



《絵本の時間 イメージイラスト》

五味太郎氏は、絵本を中心にこれまで350冊以上の著作を手がけ、日本のみならず世界的にもよく知られた作家です。子どもから大人まで幅広いファン層の支持があり、幼児向けのアニメ制作やエッセイの出版など、多方面で活躍しています。『さる・るるる』『みんなうんち』『言葉図鑑』などの代表的な作品のほか、岡山では絵本『ももたろう』やきびだんごパッケージデザインでおなじみです。本展では絵本原画約180点に加え、各作品に対する五味氏のコメントをパネルで紹介したり、DVDによる絵本の制作過程を紹介したり、五味作品の魅力を堪能することができます。

今回原画が出品される絵本は、『みんながおしえてくれました』『みんなうんち』『ぼぼぼぼ』『ことわざ絵本』『かかかか』『がいのこつさん』『ももたろう』『まどから おくりもの』『あそぼうよ』『ねえ おはなししてよ』の10作品です。

中でも『ことわざ絵本』は1986年に出版されたあと、『ことわざ絵本PART-2』、『わざわざことわざ』などシリーズで続いています。五味氏本人が『わざわざことわざ』の紹介文に、「僕本当にことわざ好きなんだなあと改めておもいます。ことわざ病なんでしょうな。なんなのでしょうね、この病は？で、そうは言っても今度の本がやっぱり一番おもしろい！と思っちゃうわけで、これもまた別の病気なのかしらね。こっちは慢性だな。『同病相哀れむ』のところでひとつよろしくお願いします。（『五味太郎図書一覧』サイト：http://www.gomitaro.comより引用）と語るほど。五味氏の生み出したことわざは、大人も子どももくすつと笑えてしまう…。ことばと絵のマッチングが絶妙でとても楽しく、魅力満載。

みなさん、どうぞお楽しみに。 【主任学芸員 中村麻里子】

資料提供：メディアリンクス・ジャパン ©GOMI TARO



《みんなうんち》 1979

平成24年度 展覧会スケジュール(3月～6月)

特 別 展

ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト
五味太郎作品展〔絵本の時間〕

4月8日(日)～5月20日(日)

5月29日(火)～7月1日(日)

岡山の美術展

おかやまアート・コレクション探訪Ⅳ 野崎家コレクション

2月24日(金)～4月8日(日)

特 別 陳 列

岡山の木工芸 知られざる名工と現代の匠たち

5月22日(火)～7月1日(日)

編 集 後 記

美術館ニュース96号をお届けします。

4月から「ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト」が開催されます。シャーンの大回顧展が岡山に来るとあって、中には楽しみにされている方もいらっしゃるかと思います。そこで「クロスメディア」って何だろう?と思われた方、筆者もこっそり調べてしまった一人です。でもご安心を。クロスメディアな活躍をした、シャーンの魅力をつつぷりと堪能できる展覧会になっておりますので、構えることなく彼の世界に浸っていただければと思います。

【O.M.】

美術館ニュース 第96号

発 行：2012年3月

発行者：岡山県立美術館

〒700-0814 岡山市北区天神町8-48

TEL：086-225-4800

E-Mail kenbi@pref.okayama.lg.jp

特 別 展

ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト —写真、絵画、グラフィック・アート—

4月8日(日)～ 5月20日(日)

立派な絵はみんな観て来た。立派な本はみんな読んだ。

しかし、まだなんのたしにもならなかった。

ここに、32歳にもなって、大工の子の私がいる。

私は物語と庶民が好きだ。フランス流の絵は私に向かない。

— ベン・シャーン

この春、ベン・シャーンの大回顧展が岡山にいよいよ巡回する。この作家をご存知の方もいるかもしれないが、展覧会の詳細とこの作家の簡単な紹介は広報物をご覧ください。何はともあれ、20世紀のアメリカを代表する作家の、日本では20年ぶりの大回顧展。年をまたいで開催された神奈川県立近代美術館葉山では記録的な来館者数と図録の売上だそうで、「新日曜美術館」と『芸術新潮』ですでに特集が組まれたことなど、どれほど彼の展覧会が日本において待ち望まれていたかが窺い知れる。

そんなシャーンの魅力は、いったいどこにあるのか。本展の図録でも、様々な分野で活躍する方々がその魅力をあまりある愛情と共に語ってくださっているが、やはり一つは彼の「クロスメディア」な活躍にあるだろう。絵画、写真、イラストレーション、これらのジャンルを自由闊達に横断しながら、しかしそのすべてにおいて彼の個性が存分に発揮されている。どれもが詩情豊かで、一つとして同じでない表情を見せ、かつ独創的な表現として結実している。20世紀前半は、国吉や藤田の例を挙げてもなくカメラを愛用する画家が少なからずいたが、シャーンほど絵画と写真を分ち難く捉え、自らのインスピレーションとした作家は希有ではないだろうか。

次に私が考える要因は、慈愛に満ちた、大衆へと向けられた彼の眼差しである。冒頭に引用した彼の若かりし日の言葉にも表れているように、シャーンは生涯を通じて画家として活動することを決意してから、まずはヨーロッパを旅し数々の泰西名画を観て回った。しかし、結局それらは自分の糧にはならなかったことについに気付く。東欧の貧しい家庭に生まれ、迫害を逃れ一家で亡命し働きながら苦学を重ねたシャーンにとっては、ブルジョワジーのための旧来の美術が、自らにとっても最も縁遠く感じられたのだろう。そしてバリ滞在時に、かの「サッコとヴァンゼッティ事件」への民衆による抗議運動をホテルから目の当たりにし、このような同時代の社会的不安定と不正義こそ、美術の力によって告発せねばならないと強く心に刻むに至る。このようにして動き出したその作品は、絵画や写真などのメディアを問わずに、一貫して無名の大衆に寄り添う形で進められたのである。

ここで私は、かのドイツの思想家ベンヤミンの言葉を思い出さずにはいられない。シャーンの生きた時代は、多くの人々が翻弄され国や社会の在り方が大きく変わっていったが、その歴史という荒波の泡と消えていった民衆をシャーンが常に凝視したのは、ベンヤミンの言葉にあるように、彼らこそが礎となって歴史が積み上げられてきたからに他ならない。そうした民衆に手向けられた彼の表現と言葉は、今日のこの世界と我々にも、ときに深く、ときに重く響き渡るはずだ。国内外から集められた作品に込められているシャーンの思いが多くの人に届くよう、担当者として心から願うばかりである。

有名な人々の記憶よりも、無名人々の記憶に敬意を払う
ほうが難しい。

歴史の構築は無名人々の記憶に捧げられる。

— ヴァルター・ベンヤミン

ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト
特設サイト<http://benshahn2011-12exhinfo/>

【学芸員 高嶋雄一郎】



長谷川等伯(信春)筆 「芦葉達磨図」

長谷川等伯（信春）筆 はせがわとうはく（のぶはる）
《芭蕉達磨図》
深い哀愁に満ちたような瞳で、遙か遠くを見つめる禪宗の始祖達磨。これは、達磨が梁の武帝と問答し、目的を達成することができずに、一片の芦に乗って揚子江を渡り魏の国に赴いたという伝説を描いたもの。衣が風に靡くさまをとらえた強い衣文線は躍動感に満ち、緻密に描かれた達磨の表情は、重苦しい内面までも伝えている。薄墨で塗り込められた背景が、薄暗く重厚な雰囲気を出すが、渡江したのは夜だったのであろうか。
長谷川等伯（二五三九〜一六一〇）は、現石川県七尾市に生まれ、当初信春と名乗り

日蓮宗関係の仏画や肖像画を描いていた。本図に捺された鼎形印は、重要文化財《花鳥図屏風》（妙覚寺蔵）ほか数点に認められるのみである。鼎形印は、三十三歳で上洛して五十一歳以降等伯と名乗るまでのどの期間かに使用したとされ、本図は四十代半ばで描かれたものと思われる。画面上部の賛には「江南野僧梵芳」との署名があるが、江南が琵琶湖の南部を指すことから、信春に近江地方と何らかの関わりがあったことが推測されている。もと神奈川県川崎市の寿福寺に伝来したことが、旧箱蓋裏の墨書から判明する。
【主任学芸員 中村麻里子】

県立美術館開館という原点

早や3・11から一年が経とうとしている。一周年に当たる日、岡山大学で国際シンポジウム「岡山から世界 国吉康雄」が開催される。私ども美術館にも関連する企画に、その日の14時46分には是非とも「黙祷」するように願った。

“岡山の美術”が世界にむかいより広がりを見せ、国際的な研究成果が岡上で開催される意義は大きい。国吉康雄がまずその先頭に立ったが、雪舟や原田直次郎、坂田一男らも、そうした試みが必要だろう。また未着手の犬飼恭平など、調査研究されるべき美術家はまだまだいる。

国際的な広がりという「空間」と、3・11が“近化の終焉の最後の一撃”といわれる大きな歴史の転換期にいる「時間」に対して、明瞭に認識をする必要がある。

今この年、開館25周年のはじまりに当たり、私たち県立美術館が果たすべき役割のためには、開館時の目的と熱意をふりかえること。それはまた四半世紀に費やされた人たちが築いた蓄積の継承と発展、なによりも県民とその背後にひかえる3・11の被害者をはじめ、日本や世界の人たちにむかい共存し共生する美術館、その県立の美術館が生み出す自由で香りたい豊かな創造力こそが必要であると思える。

人間は背中を向けて前進する、といった歴史家がいた。背中に眼のない私たちは前途が見えないのではないかと危惧してしまうが、過去にこそ現在や未来へのヒントがある。

3・11は激烈な“過去”なんかではない、“現在”そのものである。

3・11、あの日の一年前に私は盛岡から宮古へゆき、田老まで船旅を楽しんだ。あの日、あの場所、あの時間に船旅をしていた人は居ただろう。行方不明の人たちが未だ3000人と聞くたびに、私の気持ちにウジウジが起きる。そうして美術館人は“今”なにをなすべきかと思いが悩み巡る。そんな時だ、県立美術館開館時の熱気と原点を想うのである。

【館長 鍵岡正謹】

ミュージアムショップリニューアルOPEN

NEW MUSEUM SHOP “KENBICIFAKA” OPEN.

2012年4月、ミュージアムショップがリニューアルして、新たに“KENBI CIFAKA”がオープンします。新しいショップでは、気軽にアートを楽しめるお店として、新しい発見とユーモアにあふれた商品をたくさんご用意してお待ちしています。

岡山県立美術館オリジナルの商品ラインナップも充実。岡山県立美術館には、迫力あふれる水墨画、独特の感性で描かれた美しい洋画など多岐にわたる作品が所蔵されています。貴重な作品を気軽に楽しめるよう、オリジナルのポストカードやクリアファイルなど、様々な商品を随時制作していきます。岡山県立美術館に来館された記念に、楽しい商品を見つげに、新しいミュージアムショップにぜひお越し下さい。

【cifaka 作元大輔】



※イメージ画像



博物館を学びの起こる場に

2月4日（土）大野照文氏（京都大学総合博物館館長）を講師に迎え、ワークショップ「大人のための貝体新書」（対象：ボランティア）を開催した。

このワークショップは、私たちが普段生活の中で何気なく食べている「二枚貝」を題材にしている。まず、「身の回りの二枚貝について思い出す」ことから始まり、そこで出てきたキーワードをもとに「二枚貝が毎日することってなんだろう?」「二枚貝は、どんな場所でどんなふうに暮らしているのだろうか?」と展開する。そして、そこまでに気づいたことをもとに「二枚貝がどんな生き物が復元してみよう」となる。参加者は、このワークショップの間中、今までの学びや生活経験値をもとに、グループの人と一緒に考え・発見し続ける。各グループから考え出された「二枚貝の復元」は、今いる二枚貝の復元に至るとは限らない。しかし、「生物の進化は、その種が生き延びるために、必要な部分が必要に迫られて進化する」「進化の必要性が生まれれば、グループで考えた復元もあり得るし、もしかするとそのように進化をとげた二枚貝も、この地球上のどこかに存在しているかもしれない」という、生物の進化の過程や進化という言葉の向こうにある概念にまで、参加者は想いをめぐらすことができた。

約2時間という長い時間、参加者は二枚貝について考え・発見し続けた。言葉で情報を提供するレクチャー形式であれば、もっと短時間で参加者は「言葉の意味を理解すること」はできたであろう。しかし、大事なのは、「言葉の向こうにある概念」を理解することができるかどうかではないだろうか。それは「自ら、みて 考えて 結論づける」という行為がなされることを通してのみ起こるのではないだろうか。そしてこの過程こそが「学び」ではないだろうか。

社会教育・生涯学習施設である博物館が、博物館や地域の自然・歴史資産・文化資産を展示・公開・教育普及していく中で、いかに博物館を学びの起こる場にすることができるか、いかに活字媒体の域を超えた「学び」を創出していくことができるか、ということを改めて考えさせられる機会となった。

「博物館を学びの起こる場に」をテーマに実践をされている大野照文氏は、ご自身の専門分野を「古生物学・実践生涯学習学」と言われる。「実践生涯学習学」という学問の分野はなく、「生涯学び続ける人でありたい」また「ワークショップのファシリテーターも“学ぶ人”である」という氏の考え方を如実に表している造語である。到底およばないまでも、「博物館で起こる学び」について真摯に考え続けていくことが、ミュージアム・エデュケーターの仕事ではないだろうか。

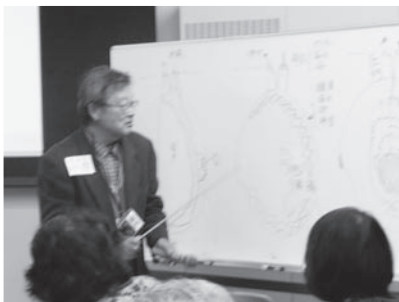
【主任学芸員（教育普及担当） 岡本裕子】



二枚貝を使ってゲームをしましょう



わかってきたことをツールを使って確認しましょう



二枚貝の復元をプレゼンしましょう

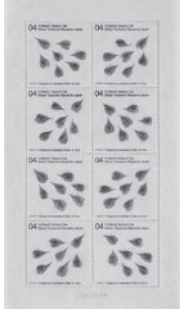
新収蔵品紹介

太田 三 郎

《POST WAR 66 戦災痕》(20点1組、2011年)購入品
《Seed Project》3点、《On The Beach》3点、《Weather Map Stamps》3点、
《広島のかげら》2点 合計11点 受贈品



《POST WAR 66 戦災痕 9. 金刀比羅神社狛犬 北区野田屋町》
紙にレーザープリント
ed.2/50 2011年



《Seed Project イタドリ 2004年3月10日岡山県津山市小原》
和紙、種子 ed.1/1 2004年

太田三郎氏は1994年より津山市に在住する美術家です。1984年より切手と消印をもとにした作品を制作し、87年からは独自文様の切手を手がけました。生命や種子との出会い、戦争の記録、そして時間や空間との対話を、作品の制作から提示しました。多くの展覧会活動が知られていますが、当館でも特別展『岡山・美の回廊』（2010年10月8日～11月7日）に、《あひるの子どもたち》と《石の小箱》が展示されました。

当館が購入したのは《POST WAR 66 戦災痕》で、素材は紙にレーザープリントです。『POST WAR』とは「戦後」を意味する太田三郎氏の造語であり、「兵士の肖像」「被爆地蔵」など、戦争で亡くなった人の無念さや家族を失った人の悲しみを問う作品を、独自文様の切手によって表現してきました。

《POST WAR 66 戦災痕》では、66年前の岡山空襲（1945年）によって痕を被った現存の立体物を、切手の図版の中に写真の形で掲載し、戦災の記録を留めます。20点の作品を、作家による説明文を読みながら見ると、岡山在住でも気がつかないことが多いです。太田三郎氏独自の切手によって、岡山の戦災を呼び起こす作品になっており、当館では購入することに決めました。

受贈品になった11点の作品は、すべて太田三郎氏による独自文様の切手です。《Seed Project》は和紙に種子を取りこみ、《On The Beach》は紙にカラーコピーと凸版印刷、《Weather Map Stamps》は紙にコピーとレーザープリント、《広島のかげら》は紙にレーザープリントです。

《Seed Project》では植物の種子、採集地、採集日が記され、3点の作品は津山市で採集されました。《On The Beach》は、海岸で採集したものを取り上げますが、いずれも東日本大震災の被害地です。《Weather Map Stamps》では、季節によって雲の動きが異なることがわかります。《広島のかげら》は、原爆ドームの西側で採集した磁器とガラスを使用しています。各作品に対して、作家はどのような思いがあるのかと思います。《POST WAR 66 戦災痕》とともに、2012年度にご紹介する予定です。

【学芸員 廣瀬就久】

新収蔵品紹介

備前焼 伊勢崎淳



《吉備・桶築》2002年



《備前壺》2005年



《備前角花生》2008年

このたび、備前焼の重要無形文化財保持者（人間国宝）である伊勢崎淳（1936～）さんの作品4点を収蔵することになりました。伊勢崎さんは、大型の彫像や細工物をよくした陶芸家伊勢崎陽山（1902～1961）の次男に生まれました。岡山大学教育学部特設美術科を卒業後、父について作陶を始め、爾来50余年、備前焼一筋に歩んできました。備前焼伝統の茶陶や器ものの他、伊勢崎さんの作陶を特徴づけるのはモダンな造形を追求した仕事です。《的》は40歳頃の作品で、石膏型で台形を作り、まわりに不規則なひだをつけたもの。代表作のひとつである《黒い太陽》（黒住教宝物館蔵）に先駆ける作品です。底部が四角く抜けていますが、何かの用を目的としない作品です。

《吉備：桶築》は、弥生末期から古墳時代にかけて岡山に栄えた古代吉備国に着想を得て制作された作品のひとつです。「桶築」は、弥生墳丘墓として日本最大級を誇る「桶築遺跡」（倉敷市）のことで、特殊器台や特殊壺など多くの土器片が出土し、古代の有力者を祀ったであろうと推測されています。伊勢崎さんは、約270cm四方のさびをつけた鉄板の上に特殊器台を彷彿とさせる大小の円筒9本を立ち並べ、人類の発展に不可欠であった鉄と水、土と火を象徴させ、古代文明へのオマージュとしています。

《備前壺》は、外側に櫛目をつけた筒形を回転する轆轤の上で、内側から膨らませることによって流れる土自ずからの動きを壺としてとどめたもの。

《角花生》は、人体をイメージしたもので、肩と腰にあたる場所に少しだけ手を入れてことにより有機的な動きを生み出しています。胸にハート形の明るい抜け肌があるのも楽しい作品です。

【学芸員 福富 幸】